2020 11

令和2年11月10日発行（毎月1回10日発行）　通巻327号

人生100年時代　共生社会の生き方情報誌

さわやか

さわやか福祉財団

『NEXT ～心と心をつなぐ工夫と取り組み～』

第3弾 動画配信中！

　ご好評いただいている当財団制作の動画「NEXT　心と心をつなぐ工夫と取り組み」、第３弾がリリースとなりました！

　コロナと共生する暮らしの中で、何ができるのか――。豊富なアイデアと明るく前向きな取り組みにみんなが参加する大阪府門真市の「ゆめ伴プロジェクト」。

　コロナ禍の中でも心と心をつなぐ活動のヒントとして、また、生活支援コーディネーターの皆様は勉強会などに、第１弾・奈良県生駒市、第２弾・静岡県袋井市とあわせてご活用ください。

動画は、当財団ホームページでご覧いただけます。

https://www.sawayakazaidan.or.jp

厚生労働省の特設サイト「地域がいきいき　集まろう！通いの場」からもご覧いただけます。
下記アドレスのトップページから「交流」をクリックしてください。

https://kayoinoba.mhlw.go.jp/

◎第４弾動画は11月中旬リリース予定。どうぞお楽しみに！

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

さぁ、言おう

2020年11月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道
想像から創造へ
見えないものを見る力 清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から
コロナ禍のピンチをチャンスに変えて
こども食堂から地域食堂への進化を目指す
ひみキトキトこども食堂ネットワーク（富山県氷見市）

13 **「地域助け合い基金」状況のご報告**

14 **応援ありがとうございます！**
「地域助け合い基金」助成先のご紹介

16 看取り・終末期を考える 裏を見せ、表を見せて…
ふれあいの心が約束する
デジャヴュな地域社会 尾崎 雄

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・
助け合いの地域づくり
20 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など
24 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介
26 NEWS＆にゅーす

⑪『さぁ、言おう』８月特別号のご紹介
⑫「地域助け合い基金」ご寄付のご案内
⑬「地域助け合い基金」助成応募のご案内
㉕『助け合い大全 ‘19』のご紹介
㉘「連合・愛のカンパ」のお知らせ
㉙みんなの広場/投稿募集
㉚さわやかパートナー・『さぁ、言おう』のご案内/表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 川北 秀人

新しいふれあい社会　実現への道

想像から創造へ
見えないものを見る力

さわやか福祉財団　理事長　清水　肇子

コロナ禍は様々な分野に多大なひずみと影響を与えているが、一方で、まさに今だからこそ「ピンチをチャンスに」と、困難な中でも新しい視点で取り組みを始めている人たちがいる。「やむに止まれぬ状況からであれ、何であれ、自分たちには何かしら動ける環境があるので前向きにやっていきたい」。先日、久しぶりに出向いたフォーラム終了後、参加者のお一人が真剣な眼差しで感想を言いに来てくださった。とてもうれしく、また頼もしく思った姿だった。

今は、学生の就職活動の時期でもある。来春卒業予定の学生たちは、例年とはまったく異なる「前例のない就活」に追われてきた。説明会も面接もすべてオンライン、内定まで一度も直接会わずじまいというケースもあるという。すでに２０２２年春新卒者もＷＥＢインターンシップなどが始まっており、まさに両者不安の中の手探りで取り組んでいる状況だ。企業側も先行き不透明な中で、限られた人員募集に頭を悩ませる。いわく求めたい中心的な人材像は、簡

潔にいえば、「ゼロから組み立て、考えられる力」を期待できる人なのだという。

〝ウイズコロナ・アフターコロナ〟では、「ピンチをチャンスに」の逆転の発想、創造性がどの分野でも重要視されている。前例にただ流されることなく疑問を持ち、問いを立てて新たな答えを導き出していく。まさに「見えないものを見る力」が試されている。

この視点は、以前からリーダー論や生き方の面からも語られているが、コロナ時代の今こそ改めて実践的に考えてみると、実は、これは、地域の助け合い活動に参加していくことで深く磨ける能力ではなかろうかと思い至る。目標を定め、目指す共生社会の方向を語り合う。しかし、実践には手持ちの物品や資金も当然限られている。その中で工夫をし、多様な他者の環境や心のうちを想像しながら柔軟に実行していく。これらが自然に行われている現場だからだ。

企業や学校がこれから必要な人材育成を考えるとき、研修や学びの体験の場としてこうした地域の活動と具体的に関わり合うことは、単なる地域貢献の意味を凌駕した効果が期待できる。住民の活動の立場でも、積極的に働きかけて受け入れ、つながり合ってほしいと願う。

そして「見えないものを見る力」は、決して戦略的なものだけでなく、対人関係から見れば、自分と異なる相手の受け入れ、思いやりの基本でもある。また、個人の立場からいえば、従来の慣習にとらわれない「新しい豊かな生き方・働き方」への転換でもあるだろう。

人というのは、案外、思い込みで見逃していることが多いものだ。地域のことも、関心が湧けば見えるものも風景も違って、新たな発見や生きがいにもつながる。コロナ禍で大変な今だからこそ、これまで見えていなかったもの、見てこなかったものを意識して探っていこう。

コロナ禍のピンチをチャンスに変えて こども食堂から地域食堂への進化を目指す

ひみキトキトこども食堂ネットワーク（富山県氷見市）

食を通じて子どもたちにあたたかい居場所を提供する「こども食堂」の運営が、コロナ禍で困難に見舞われています。各食堂が今後の活動のあり方を模索する中、富山県氷見市の「ひみキトキトこども食堂ネットワーク」では、この状況下でもできることをと、いち早く活動を再開。ピンチをチャンスに変えて新たなつながりを生み出そうとする、その取り組みを紹介します。

（取材・文／城石 眞紀子）

連携や情報交換の場として ネットワークを設立

富山県の北西部、能登半島の付け根部分に位置する氷見市。人口は約4万7000人、定置網漁で栄えた漁師町が海沿いの中心部にあり、東は海に面し、三方は山と谷に囲まれる自然豊かな地域だ。

かつては3世代同居世帯が多かった氷見市でも、核

ひみキトキトこども食堂
ネットワークロゴ

家族化が進展。孤食や貧困などは大都市だけの問題ではないと、安心して子育てができる地域づくりを目指して、市社会福祉協議会が実施している「子育て支援ボランティア発掘・育成講座」で、こども食堂についての講座を実施したのをきっかけに、２０１６年８月に氷見市で初となるこども食堂「ふじみだい」が誕生した。翌17年6月に「あさひがおか」が、同7月には「みやだ」が相次いでオープン。この3つの地域のこども食堂関係者が集まって17年8月に設立されたのが、「ひみキトキトこども食堂ネットワーク」だ。キトキトとは、富山の言葉で「生きがいい」という意味だ。

ふじみだい代表で、ネットワークの代表を務める向（むかい）優子さん（45歳）は、学童保育支援員でもある。子育てを当事者だけでなく地域で支え合う場づくりに尽力する中で、行き場がなく、コンビニの前でたむろする子どもの姿に胸を痛め、「何か自分にできることはないか」という思いから一念発起。こども食堂の開設にこぎつけた。

「思いだけで始めたものの、実際に活動してみると、さまざまな問題がもち上がりました。例えば、食材をどうやって調達したらいいのか。どうすればもっと、子どもたちに来てもらえるのか……。ほかのこども食堂でも似たような問題を抱えていたので、連携することで互いの弱いところを補い、さらにはこども食堂のよりよい支援方法やまだ実施されていない地域にも活動を広げていければと、ネットワークを立ち上げることにしたんです」

ネットワーク代表の向さん

地道な活動で支援の輪を拡大

こども食堂を組織化したメリットの一つに、支援を受けやすくなったり、支援物資の分配が効率よくできるようになったことが挙げられる。氷見市独自の取り組みとして注目されるのが、「ベジタブルバンク」だ。これは、まだ食べられるのにさまざまな理由で処分されてしまう食材を、市内で展開されているこども食堂に届ける社会福祉活動で、ＪＡ氷見市と市社協が共同でつくったシステムである。ネットワー

クの活動をサポートする、市社協こども支援課チーフの澤田有紀さんに仕組みを聞いた。

「ベジタブルバンクは、こども食堂だけで食材を確保するのは困難との相談を受けて、ＪＡ氷見市に子どもたちやこども食堂の現状をお伝えし、力を貸していただいて完成したものです。氷見市は野菜の生産者が多い地域なので、ＪＡ支所に専用ＢＯＸを設置。農家の皆さんから、例えば売り物にならないＢ級品などを寄付していただきます（毎月第２・４の水・木曜日）。野菜果物が集まると支所から市社協へ連絡が入り、市社協のスタッフが取りに行ってネットワークに届けられ、そこから各こども食堂へと振り分けられる仕組みになっています。また、お米に関しても『古米でもいいので分けてもらえないか』とお願いしたところ、『子どもたちに古米を食べさせるわけにはいかないので、新米を食べさせてあげてくれ』と、17年と18年は１８０キロずつ寄付していただきました」

市社協の澤田さん

ほかにも、氷見ライオンズクラブでは、こども食堂サツマイモ農園の開設や野菜・果物の寄付に加え、「氷見ライオンズクラブこども食堂基金」を設立。地元の西條中学校生徒会は募金活動で集めた寄付金を贈呈してくれるなど、活動に共感してくれたたくさんの地域の法人・個人からの支援・協力の下、各こども食堂とネットワークは運営を継続・発展させてきた。

（左）西條中学校で開催された朝食堂　（右）ベジタブルバンクに届けられた野菜

「こども食堂のある3つの地域だけでなく、ネットワークのメンバーで氷見市こどもまつりに参加したり、子どもたちと一緒にさつまいもや米の収穫体験をしたり、西條中学校では朝食堂を実施したり。朝食堂ではアツアツの氷見うどんにみんな大満足な様子で、参加者は100名を超える大盛況でした。また大学の授業でこども食堂のことを知った富山国際大学の学生の皆さんは、『若者ももっと関わったほうがいい』と各こども食堂に修行に来て、一緒に食べたり、遊んだり、勉強しながら交流を図ったりもしました」と、向さんたちは活動を続ける中で広がる交流や支援の輪に、手応えを少しずつ感じ始めていた。

コロナ禍でもできることを

そんな矢先に発生したのが、新型コロナウイルスの感染拡大だった。その影響から活動は休止となり、小中学校の臨時休校が長期間に及び、今後もどうなるか予想がつかない日々。誰もが不安を抱える中でネットワークでは、「こんなときだからこそできることがあるのでは」と、「キッチンカーde繋ぐひみキトキトこども食堂」と銘打ったカレーライスのテイクアウトによる無料昼食提供を企画。市内全域で実施することにした。

「自宅で過ごす〝ステイホーム〟の長期化で、子どもたちは学校に行きたいけれど行けない。友達に会いたくても会えない。親御さんたちも学校給食がないことで、毎日朝昼晩と食事を作らなければいけない。そうしたストレスを少しでも軽くして、たとえ一瞬でも子ども同士が会えたり、気分転換の場になればと思って。コロナ禍によってせっかく芽生えた地域のつながりが離れていきそうな気がして、何とかつなぎ止めたいという思いもありました」と向さん。

対象者は0～18歳までの子どもとし、3密を避けるためにドライブスルー形式に。受け取り時間は11時30分から13時までとした。

「〝繋ぐ〟をコンセプトに、こども食堂を通じて、地域・学校・関係機関等が協働できる工夫も行いました」と話すのは澤田さん。

「市の担当課には、市が所有するキッチンカーの使用許可を快諾いただいたほか、当日の運営をサポートしていただけるよう、民生児童委員、主任児童委員に市社協から声をかけさせてもらい、実施する場所や子どもへの開催周知を各小学校長にお願いしました」

初日の5月18日は、氷見市立西の杜学園グラウンドで、校区の小中高生に約150食の温かいカレーが振る舞わ

れた。開始時刻になると、助手席に子どもを乗せた車が続々と到着。会場整理や車の誘導を担ったのは地域の人たち。車越しに車内の子どもや保護者らに、「元気だった？」などと声をかけて談笑する姿や、学校の先生たちも顔を見せて子どもたちに「もうちょっとだから頑張ろうね」と声かけをするなど、微笑ましい様子をあちこちで見ることができたという。ちょうど分散登校も始まり、下校時にカレーを受け取る子どもたちもいた。その後も、小学校区ごとに計8会場で実施され、合計約900食を提供。

「キッチンカーde繋ぐひみキトキトこども食堂」当日の様子

「自分たちが思い描いていた通りの光景を、現場で目の当たりにすることができました。カレーを食べた後に、『おいしかったよ』とお礼を言うため、わさわざもう一度来てくれた子や、SNSで活動を周知してくださる方もいて、うれしかったし、楽しかったですね。地域の方たちがいてくださったからこそ成功できたこども食堂のキッチンカーであり、実施してよかったと実感できました」と向さん。澤田さんは、「ピンチをチャンスに、ではないけれど、大変な時期だからこそ何かできると動いた結果、新しいつながり、強いつながり、連携のつながり等、さまざまなつながりを持つことができました。

こども食堂は市内にまだ3か所しかないので、活動を知らなかった人たちには新鮮に映り、こども食堂の存在をアピールできたのもよかった」と話してくれた。

プラスアルファの活動で多世代を結び地域の絆を育みたい

コロナ禍でも、工夫すればできることはある。親も子どもも待っていてくれるという手応えを得たネットワークのメンバーは、その後、6月から各こども食堂を再開。現在、向さんの「ふじみだい」ではテイクアウトに切り替えて実施しているが、利用者は以前の3倍に増えたという。また、こども食堂が実施されていない地域の人たちからも、「定期的にやってほしい」との声が聞かれるそうで、今回のキッチンカーでのプロジェクトは、こども食堂のある地域に思いを根付かせていく一つの種まきとなった。その植えた種をしっかりと育てていくことがこれからの目標だという。

コロナ禍でのテイクアウト弁当は大好評

「ふじみだいのボランティアスタッフは、藤見台公民館で行われている百歳体操に通うおばあちゃんたちに声をかけて参加してもらってるんです。私はこき使うんですが（笑）、みんなすごくおおらかで、実に楽しそう。一緒に栗拾いをして一日中栗の皮をむいたり、こども食堂がないときでもみんなでご飯を作って食べようと集まったり。こども食堂のためにと野菜作りを始めた人もいます。最初は子どもたちのためにと始めた活動ですが、そういう姿を見ているうちに、こども食堂は、お年寄りが活躍できる場としての可能性も秘めているんだなと思うようになりました。おばあちゃんたちとはいろんな話をするんですが、戦争の話とか昔の暮らしとかを聞けるのも楽しくて。子育て中のお母さんたちがそういう話を聞ける機会がたくさんあればいいな、と思ったりもします」

だからこそ、目指すのは子どもだけ

でなく、多世代にわたる地域の人たちの居場所となり、交流の場となる地域食堂。そのためにも、今後も何かしらの形で食堂を展開して思いを共有し、一緒に活動してくれる人たちを増やしていきたいと抱負を語る向さん。澤田さんは「始めたきっかけはどうであれ、地域コミュニティをどうしていったらいいかまでを考えてくれているのが頼もしい」と目を細め、最後にこう締めくくった。

「コロナ禍で新しく事業を立ち上げるのは難しくても、既存の事業にプラスアルファするという取り組み方もあります。例えば高齢者の地域サロンの会食の場に、月1回こども食堂の要素を加えて2世代3世代の交流の場をつくるとか。そうしたノウハウを伝えていくこともネットワークの役目かなと。いずれにしても、これからも進化し続けていくんだろうと思うと、今後がますます楽しみでもあり、我々も全力でサポートしていきたいと思います」

コロナに萎縮することなく、前を向いて活動する意欲がとても頼もしく感じた。

ふじみだい百歳体操で声をかけられたお年寄りが、今では率先してメニューを考案

ひみキトキトこども食堂ネットワーク

氷見市内のこども食堂関係者によって設立されたネットワーク組織。互いのこども食堂の質の向上、活動の認知・信用度の向上・普及拡大、支援物資の効率の良い分配などを目的とし、毎月１回合同ミーティングを実施。その他、活動を検討している地域への助言やサポートを行っている。各こども食堂の開催日時は、「ふじみだい」が毎月第２・４土曜日11:30～13:30（藤見台公民館）、「あさひがおか」が毎月第３土曜日11:30～13:00（まちなかサロンひみ）、「みやだ」が毎月第２・４土曜日11:30～13:30（宮田学童保育館）。対象者は市在住の子どもとその保護者で、参加費は無料。

●連絡先／〒935-0031　富山県氷見市柳田940番地１　藤見台公民館内
ひみキトキトこども食堂「ふじみだい」
電話 0766-75-9711

「地域助け合い基金」で
コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆さまからのご寄付をお待ちしています！

1．寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含みます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラーの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

2．税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

3．ご寄付の方法

（1）銀行振込によるご寄付

三井住友銀行　浜松町支店　（普通）　口座番号　７８５９４５２
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　（普通）　口座番号　００９５４４６
（口座名義 ※いずれも同様）
公益財団法人さわやか福祉財団　地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

（2）郵便振替によるご寄付

（口座記号番号）　００１１０－７－７０９６２７
（加　入　者　名）　公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名 (区は東京都の特別区）と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。※手数料不要の振込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

（3）クレジットカードによるご寄付

左ページのＱＲコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、18ページおよび当財団ホームページをご参照ください。
「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

＜寄付・助成のお問い合わせ＞
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751　FAX：(03)5470-7755
メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

「地域助け合い基金」状況のご報告

コロナ禍の中、5月に立ち上げたさわやか福祉財団「地域助け合い基金」。10月15日現在の状況をご報告いたします。

◎寄付受付額　154件　808万9200円
このほかに当財団より3千万円を供出

◎助成実行額　228件　2975万9350円
（10月15日　当財団ホームページ開示時点）

前月号でご報告しました9月15日以降に12件のご寄付をいただき、40件の助成を速やかに実行いたしました。

ご寄付とともに、「コロナの象徴が、人と人との隔離分断、人間の証明こそが、地域の出会いと助け合い」などの素晴らしい激励のコメントもいただいております。また、次ページでもご紹介しています通り、助成を実行させていただいた全国各地の団体からは、コロナ禍での活動の危機を乗り越え、今後の取り組みへの弾みになった、という大変うれしい報告が多数寄せられております。

コロナ禍の厳しい時代ではありますが、困難なときこそ地域住民が心をつなぎ、助け合って暮らすため、皆様からのご支援、ご寄付を今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

（事務局長・内田）

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額も一覧できますので、寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください！

クレジットカード決済ページ

財団ホームページ内基金関連ページ

基金に関するご意見・お問い合わせ

＜地域助け合い基金担当＞
電話：（03）5470-7751　FAX：（03）5470-7755
メールアドレス：mail@sawayakazaidan.or.jp

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、全国の助け合い活動を支援している「地域助け合い基金」。助成のお申し込みを多数いただき、速やかに実行しています。今月号も、3団体の活動と助成後の報告をご紹介します。なお、活動報告は当財団ホームページに随時アップしておりますので、ぜひご覧ください。

愛知県名古屋市

経済的制約を気にせず活動できた

愛知オルタナティブ協議会

助成金額　10万円

愛知オルタナティブ協議会は、メンタルヘルスの問題を抱える方々に対し、月1回の名古屋市内におけるサードオピニオン会（対話会）、快復に向けた支援を行っています。コロナ禍でメンタルヘルスが悪化している人が少なくなく、より深い関わりがしたいと本基金の助成に応募してくださいました。助成金は、コロナのために閉じこもりがちだった名古屋市中心の地域のメンバーが、普段ではなかなか経済的制約等で交流できないようなことに活用されたということです。各メンバーに、交流にかかる経費として、日頃から関わっている方や「お金があればもう少しこういうことができる」ということに自由に使ってもらうことで、よりこの助成金が活きてくると思っていた通りになったことはうれしい結果、と報告をいただきました。第2波到来と言われ、再び活動が狭まりつつある今、手弁当で活動している団体として地域で何ができていくのか、これを機にさらに考えていきたい、とのことです。

大阪府大阪市

一人親世帯の支援につなげていく

NPO法人子どもネットワーク・ワルツ

助成金額　9万9600万円

子どもネットワーク・ワルツでは、これまで月1回の「子ども食堂もぐもぐ」を開催してきました。コロナ禍により、子ども食堂利用小学生・中学生を対象とした学習会は長期休暇中です。本基金の助成金は、コロナ禍で生活がより一層困難になった一人親世帯を中心に、少しでも困窮を緩和するため、お弁当を配布することに活用されました。配布する中で、一人親世帯が11世帯確認できたので、これらの家庭の支援を活発化させていきたいとのこと。また、子ども食堂の周知にもつながったということです。「ここから一人ひとりの子どもたちの支援につながれば」「休止していた子ども食堂を8月22日に再開し、お弁当配布から食堂への参加がどのように変化していくのかを見極めたい」と報告を下さいました。

「気持ちよく来て帰っていただき、また来訪したいと思う食事提供ができているかを、いつも問いながら活動していきたい」と今後の抱負も添えてくださいました。

鳥取県琴浦町

3密回避で百歳体操、マスク作成

古布庄地域振興協議会

助成金額　10万円

古布庄地域振興協議会は、山間部に位置し高齢化率44%の古布庄地区で、旧保育園園舎を活用して高齢者の健康維持や孤食防止、また共通の趣味を通して地域住民の親睦を図るなど、居場所として集まる場を提供してきました。ランチ会食・カフェと、週2回の百歳体操は参加人数30名を超える密集環境だったため、コロナ禍での感染予防を鑑みて休会。本基金の助成金で、テレビとDVDプレーヤー、体温計、ミシンを購入しました。これらを活用して、「週2回百歳体操をしたい」という参加者の希望に応えるため、体操する部屋を今までの1部屋から2部屋に分け3密を解消。また、来館時の検温、ミシンでマスクを作成することができたということです。

「これからも、子どもから大人まで安心して楽しく暮らしていくために、今何が必要か、何をしなければならないか、住民の皆さんと思いを共有しながら活動を続けていきたい」との報告をいただきました。

看取り・終末期を考える

裏を見せ、表を見せて…

ふれあいの心が約束する デジャヴュな地域社会

尾﨑　雄

デジャヴュという言葉がある。初めて訪れた場所なのに、既にきたことがあると思うような感覚をさす。いわゆる既視感とか既知感覚だ。一説によると、旅行好きや感受性が豊かな人に起こりがちだという。

年を取れば取るほど人生という旅の記憶がつみかさなり、いま見聞きしていることが過去の旅路で見聞きしてきたことの繰り返しにすぎないように見えてならないことがある。メディアが、新奇なトレンドかのように伝える社会現象は、ときとして、高齢者には二番煎じに映る。婦人服の最新ファッションは実は過去の最新モードの繰り返しであるように。

新聞、雑誌やテレビのワイドショーなどが盛んに報道する「ハッピーな田舎暮らし」もデジャヴュの物語である。昭和、平成時代に新聞記者をしていた私は、都会人の田舎復帰願望やカントリーライフにスポットライトを当てる記事を何度か書いてきた。脱サラ会社員のペンション経営ブームや都市住民が農山村に移住するIターン現象である。

ずいぶん前のことだが、長野県の大鹿村を訪ねたことがある。農村歌舞伎などの伝統芸能や「中央構造線博物館」があることで知られる。「日本で最も美しい村連合」の創立に参加した自然豊かな地域だ。南ア

おざき　たけし
老・病・死を考える会プラス世話人
1942年生まれ。元日本経済新聞編集委員。認定ＮＰＯ法人コミュニティケアリンク東京副理事長・日本死の臨床研究会会員・さわやか福祉財団評議員ほか

ルプスに抱かれた最奥の集落に住む地元住民は70歳、80歳以上の一人暮らしや老夫婦がほとんどだった。若者は、ふるさとを出ていき、目につく子供たちは外国や県外都市から移住してきた新住民の家族だった。その父親にあたる一人で、外国人の男性に会うと、農業を営むかたわら東京の出版社と契約して翻訳の仕事をしていた。いまを去る30年も昔のことである。

新住民は日用品の買い物を生協の定期巡回販売車に、旧住民は農協のそれに頼るなど微妙な違いがあっても、適切な距離を保ちつつ、思い思いに暮らす山里の風景は現代の桃源郷だ。集落の長老によると、県外から来ようが、外国から来ようが、約束事を守ってくれれば、だれでも歓迎する。

「道で会ったら必ず挨拶をかわすこと、村祭りなど地域の行事を手伝ってくれること、村人が急病になったらマイカーで町の医者や病院に運んでくれること」。その代わり、村人は野菜の保存法とか山菜の探し方、薪にできる燃えやすい樹の見分け方といった、その村のその集落ならではの農作業や山仕事の知恵を提供する。

新型コロナウイルスと共生しなければならない時代が目前に迫っている。でも、ＩＣＴ（インフォーメーション・アンド・コミュニケーションズ・テクノロジー）を活用すれば、だれでも都会の喧騒を逃れ、ストレスから解放されて、豊かな自然に恵まれた農山村で最先端の仕事ができるようになるだろう。ただ、21世紀の桃源郷にはそれにふさわしい約束事があるはず。

新たなコミュニティづくりとか地方創生といった理念や理想がもてはやされているけれど、それらは地域の付き合いと地道な助け合いがあってはじめて成り立つ。新たな制度やシステムも大事だが、心がふれあう人づきあいの機微をわすれてはコミュニティの再生や地域おこしはおぼつかない。

つながろう、心で　広げよう、笑顔の助け合い！

「地域助け合い基金」でコロナ禍を乗り越えて共生社会へ

【助成応募のご案内】

1.期　間　常時受付。基金の範囲内で、配分は随時行います。

2.対象とする活動

共生社会を推進するための助成として、地域で暮らす人同士の助け合い活動（つながりづくりを目的とした居場所や地域活動を含む）。新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含みます。高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラーの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

3.助成額・回数

助け合い活動の開始、維持、発展のため具体的に必要とする額。上限15万円。原則として１回。ただし、やむを得ない時は２回。

4.助成の対象

法人格の有無を問いません。個人による活動も含みます。

5.応募方法　当財団ホームページの「助成応募要領」で詳細をご確認のうえ、申込書および必要添付書類をメールまたは郵送にて当財団までご送付ください。

<メール送付先>　tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

<郵送先>　〒105-0011　東京都港区芝公園2-6-8　日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団 「地域助け合い基金窓口」

6．その他

助成金を活用して行った取り組み内容、活動の効果をご報告ください。

助成応募時の推薦、あるいは、助成を受けた活動の報告ご提出時に、地域の生活支援コーディネーターとの連携をお願いしています。また、助成した活動の報告内容については、当財団のホームページや冊子等で公開させていただきます。

【総合お問い合わせ】　公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011　東京都港区芝公園2-6-8　日本女子会館7階
電話（03）5470-7751　FAX（03）5470-7755
メールアドレス　mail@sawayakazaidan.or.jp
※応募書類の送付先メールアドレスとは異なりますのでご注意ください。

新しい
ふれあい社会づくりに
向けて

いきがい　ふれあい　助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **新地域支援事業・助け合いの地域づくり**
  北から南から　各地の動き
- **その他の財団の活動　など**
  ご支援ありがとうございます。
  さわやかパートナー（賛助会員）・
  ご寄付者の皆様のご紹介

NEWS＆にゅーす

北から南から

新地域支援事業・各地の動き

（2020年9月1日～9月30日）

●全国各地で、推進の支援をしています
●活動の一部を紹介しています

生活支援コーディネーター・協議体と連携

埼玉県

2日／ウェブによる地域ケア会議の手法を示すため、埼玉県地域包括ケア課主催でモデル実施が行われ、当財団も生活支援コーディネーター役として協力。専門職は高齢者に直接接する機会が多く、コロナ禍で集合して会議を行うことを危惧する声も多いことなどから、ウェブ開催の要望を受けて県がマニュアルを作成して実施したもの。

県が自治体の要望を受け止めリードする姿勢が、県全体の地域包括ケアの底上げとモチベーションアップにつながっている。（岡野）

朝霞市（埼玉県）

30日／各第2層協議体間の情報共有の場として、朝霞市で第2層協議体全体学習会が行われ、当財団が講師を務めた。今秋から移動スーパーが市内で稼働するため、今後の協議体の参考に、移動スーパーの企業担当者から説明を受け理解を進めるとともに、各第2層協議体でアンケートやヒアリングによる買い物支援のニーズ調査を行い、学習会で共有することとした。企業からの説明で、依頼があった先には原則週2回継続訪問するため詐欺事件防止や認知症傾向の発見等につながることもあり、警察や地域包括支援センターとも連携できる体制をとっている、などの情報を得ることができた。各協議体からの現状報告では、ラジオ体操による集いの場と見守り、通信配布による見守りなどが共有された。財団からは、企業も一緒に地域をつくり出していく仲間と考え、企業とのネットワークも活用しながら協議体の活動を進めてほしい、とまとめた。（岡野）

中央市（山梨県）

30日／山梨県のアドバイザー派遣事業として、中央市の第1層協議体「生活支援つながり隊（生活支援体制整備推進協議会）」に当財団から鶴山と一緒に参加した。協議体に新たなメンバーも加わり、共通理解を深めることが目的。南アルプス市生活支援コーディネーターの斉藤節子氏、小林陽一氏にも協力してもらい、県健康長寿推進課畑野博之主査と共に意見交換の場をつくり理解を深めた。同市長寿推進課の中楯孝博課長のあいさつ、市担当者のこれまでの取り組み経過の報告と生活支援コーディネーターのコロナ禍での活

動等についての報告等の後、財団・鶴山より生活支援体制整備事業の意義や生活支援コーディネーター・協議体の役割等、事例を交えて講演し、ポイントを確認した。その後、できる限り理解を深めようと質疑応答を参加者全員で行った。今後も関係者の理解が深まるよう支援していく。（川田）

山梨市（山梨県）

3日／山梨県のアドバイザー派遣事業として「令和2年度山梨市地域まるごと支援会議」（第1層協議体）が山梨市役所で開催され、当財団も協力。コロナ禍のため県と財団はリモート参加となった。市から昨年度の振り返りの後、財団・鶴山より生活支援コーディネーターと協議体の役割について事例を交えて説明。昨年開催したフォーラムがとても良い反響だったが、コロナとなりそのままになっていた。「コロナ禍でつながりや助け合いの必要性は高まっている。感染を防止しながらつながりや助け合いを広げるために、どう働きかけていけばよいか話し合い、住民に働きかける必要がある。第2層をどうやってつくるか、エリアはどうするかなどを考えて動き出してはどうか」とアドバイスした。

昨年、第1層協議体が立ち上がり、フォーラムを開催。今後、2層づくりにフォーラムで手を挙げた人たちをどう生かすかについても話し合った。今後に期待したい。（川田）

協議体編成のための研修会・勉強会等に協力

三春町（福島県）

15日／三春町で、住民勉強会の第1回目が行われた。3密を避けるために、午前42名、午後52名と2回に分けて実施。同町から当財団にアドバイザー依頼があり、8月の講演会に続いてこの勉強会を実施し、実質的な第2層協議体を立ち上げることになったもの。

町の現状と勉強会主旨説明の後、グループワークを行い、地域課題と自分たちにできる活動について話し合った。通院、買い物、雪かき等の課題に対し、自分たちでできる活動として、生活支援や近隣同士のコミュニケーションの場づくり、移動販売等が挙げられ、主体的で前向きな発言が多かった。10月にも全体で集まり第2回目の勉強会を開催し、その後は地域で話し合いを継続する予定。（岡野）

妙高市（新潟県）

6日／新潟県のアドバイザー派遣事業として、妙高市で第2層協議体の選出を目的とした勉強会の第1回目が開催され、当財団が講師としてリモートで協力。同市には昨年度も一度、県担当者と訪問して関係者の勉強会を行っており、その後、市内の関係者が協議して、2層4地区のうちモデルとして妙高地区から2層協議体をつくっていくことになった。この日は市担当者の事前の呼びかけなどもあり、区長をはじめ多くの住民が参加した。市福祉介護課の岡田雅美課長のあいさつ、行政説

明に続き、財団より「目指す地域像を考えよう」として講演し、参加者に事業の意義への理解を深めてもらった。その後グループワークを行い、目指す地域像について話し合い共有したことで、今後に向けた住民の機運も高まったようだった。勉強会は今後、10～11月で2回実施する予定。終了後、市の関係者や県担当とともに振り返りを行い、進んで活動に参加したいという〝光る人〟を見つけながら、さらに次回に向けて仲間の輪を広げていこうと共有した。（鶴山）

十日町市（新潟県）

28日／新潟県のアドバイザー派遣事業として十日町市から依頼を受け、第2層の体制づくりと第1層の再編を含めた今後の進め方について市と社協、生活支援コーディネーター、県とともに打ち合わせを行った。十日町市は、第1層は2017年に設置、生活支援コーディネーターは社会福祉協議会に委託、第2層は未設置である。一方で、地域運営組織の取り組みが進んでおり、また、地域おこし協力隊や集落支援員など街づくりの活動が県内でも活発なまちでもある。今後、第2層の体制づくりとして1か所、地域運営組織が活発な地区（下条地区）でモデルをつくりたいとの市の方針。目指す共生社会は同じ方向であることを共有、まちづくりと助け合い地域づくりの共通点と相違点を整理して、すべてを生かす方向で進めていこうと話し合った。（鶴山）

生活支援コーディネーター情報交換会の準備会に協力

群馬県

10日／「群馬県新地域支援事業推進協議会」が県レベルの企画として実施する「生活支援コーディネーターブロック別情報交換会」について準備会が開催され、当財団がメンバーとして参加した。この企画を通して、県内自治体の生活支援コーディネーターを中心に行政・社協などの生活支援体制整備事業関係者のネットワーク構築を狙う。（長瀬）

生活支援コーディネーター養成研修等に協力

群馬県

23日／群馬県で、県レベルの企画として進めている「生活支援コーディネーターブロック別情報交換会」の西部ブロックの会が開催され、当財団が事務局として協力した。生活支援体制整備事業は自治体ごとの取り組みのため、関係者も現場の情報を得にくい。この企画では、各自治体の進捗状況などを共有し、事業推進に生かすことを目的にしている。今回も、積極的な意見交換が行われた。（長瀬）

助け合いの地域づくりのために協力

武蔵村山市（東京都）

28日／武蔵村山市で「助け合い研修会」が開催され、当財団が講師を務め

た。同市では5つの第2層圏域のうち、西部、南部圏域で生活支援の有償ボランティアを行うことになり、あらためて有償ボランティアについて学ぼうと、第1層生活支援コーディネーターがこの研修会を企画。また、その他の2層圏域でも有償ボランティアを検討していることから、第2層生活支援コーディネーターは全員参加した。研修では、西部、南部の2圏域が有償ボランティアの取り組みについて発表した後、財団から「訪問助け合いテキスト」を用いて有償ボランティアの考え方について説明。労働との違いや、頼むほうも頼まれるほうも気持ちよく助け合いを進めるために、利用者にも有償ボランティアを正しく理解してもらう必要があること等を説明した。（岡野）

能美市（石川県）

23日／能美市では、助け合い・支え合い活動の継続・拡大による地域共生社会の実現を目指し「のみ地域力強化支援ファンド」が創設された。このファンドは、市内の地域課題を解決する互助活動に対して活動費を支援するもので、さわやかインストラクターの吉村久美子氏も設立・運営に協力している。この日は創設イベントとして「たすきリレー」が開催され、根上総合文化会館から市役所本庁舎までの約10キロを、副市長と、中学生をはじめとしたさまざまなボランティア活動者が思いを込めた「たすき」をつないだ（写真）。あたたかい互助のある地域に向けて、力強い一歩を踏み出した能美市の取り組みを、当財団も連携しながら推進していきたい。（髙橋）

その他

18日／関東信越厚生局主催の「令和2年第1回地域包括ケア事例研究会」が開催され、参加した。参加者は関東信越管内の生活支援コーディネーターや行政等50名ほど。コロナ禍のため定員を絞り、会場参加とオンライン参加を併用して行われた。テーマは「新しい生活様式を考える」とし、厚生労働省老健局認知症施策・地域介護推進課の田中明美課長補佐、埼玉県立大学大学院の川越雅弘教授の講義に続き、「コロナ禍における住民の取り組みと工夫」と題して助け合いの取り組み事例が紹介された。事前に参加者にアンケートを取り、その課題からテーマをいくつか取り上げ、後半にはグループワークで情報交換が行われた。コロナ禍での新しい暮らしの中で、どのように住民の力を生かし地域包括ケアを推進していくのか、情報提供や助言を受けて、知恵を出し、前に進む良い機会になったと感じた。（鶴山）

（本稿は、岡野貴代、川田利輝、髙橋望、鶴山芳子、長瀬純治）

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

（敬称略）（2020年9月1日～9月30日財団受付分）※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますことをご了承ください。

さわやかパートナー個人（56件）

（都道府県別50音順）

北海道
小山　義夫
杉本　忠三郎
関口　岩雄
八木橋　道子

宮城県
小野寺　憲一
小野寺　寛

茨城県
青山　靖男
桑名　裕子
関　実枝子

栃木県
川合　康司

群馬県
関山　二朗

埼玉県
島村　孝一
滝口　由美子

千葉県
薄　幸夫
栗田　武
田中　光子
鶴岡　恵美子
匿名希望

東京都
天野　寛子
石関　里英
大塚　正民
河内　理美
小泉　純二
高島　一雄
高橋　清美
永田　美樹
藤沼　彰久
本間　達三
柳田　延和
横山　進一

神奈川県
石毛　陽子
菊田　精一郎
佐藤　順一
鈴木　裕司
津田　武
西原　久夫
平田　行雄

富山県
岡﨑　格

山梨県
清水　喜久夫

長野県
福沢　千恵子

岐阜県
三輪　正善

愛知県
大秋　恵子
清水　サチ子
野村　圭一
安田　順子

滋賀県
伊藤　博

大阪府
関本　芳孝
高嶋　宏臣
高橋　伸治

奈良県
藤　一男

広島県
藤田　善久

徳島県
岡山　千代子
横野　はつみ

愛媛県
篠川　光加

福岡県
森山　彰

宮崎県
富髙　功

さわやかパートナー法人（13件）

（50音順）

曙ブレーキ工業労働組合
NPO法人あらた
川崎信用金庫
認定NPO法人
コミュニティ・サポートセンター神戸
NPO法人さわやか学舎
NPO法人
さわやかファミリーサポートセンター
スミセイ保険サービス株式会社
一般社団法人全国労働金庫協会
NPO法人地域福祉を支える会そよかぜ
有限会社ディーアンドイー
NPO法人
日産労連NPOセンター「ゆうらいふ21」

富士急行株式会社
株式会社読売新聞東京本社

一般ご寄付（3件）

（50音順）

石福ジュエリーパーツ株式会社（2万円）
栗田　武（　5万円）
一般社団法人日本メンズファッション協会
（4万8421円）

地域助け合い基金ご寄付（8件）

（ご寄付日付順）

小野寺　寛（1万円）
高橋　恵理（3千円）
野村　俊子（1万円）
國生　美南子（3万円）
松本　晴雄（5千円）
平　智子（3万円）
増元　秀雄（1万円）
匿名希望（5千円）

いきがい・助け合いサミット in 大阪

『助け合い大全'19』

昨年９月に開催した「いきがい・助け合いサミット in 大阪」のすべてを収録した『助け合い大全'19』です。

サミットでの全体シンポジウムと各分科会における発言要旨をまとめた『パネル編』、ポスターセッション出展の全作品を掲載した『ポスター編』、そして『提言編』を３冊セットで頒布しています。助け合い活動、〝お互いさま〟の共生社会づくりに、ぜひお役立てください！

お申し込みは当財団まで → mail@sawayakazaidan.or.jp
１セット2,000円（税込み）送料別途

※３冊セットのみでの頒布となります。

【助け合い大全'19 提言編　目次】

- いきがい・助け合いサミット in 大阪の意義と特徴
- 全体シンポジウム発言要旨
- 分科会１～54
  提言／登壇者／議事要旨
- ポスター展
- いきがい・助け合いサミット in 大阪を振り返って

ポスター編　提言編　パネル編

さわやか福祉財団

NEWS & にゅーす

「こんな時だからこそ、社会とつながろう、できることをしよう」

～動画『NEXT　心と心をつなぐ工夫と取り組み』の現場取材～

助け合い活動は、〝3密そのもの〟です。今、コロナ禍の新しい暮らしに合わせた取り組みが各地で始まっています。それは「会えないならどうやってつながるのか」「気になるあの人に笑顔になってほしい」などの思いから、住民の話し合いが何度もなされ、その実現に向けてたくさんの知恵や工夫が生まれています。一方で、「コロナだから集まれない」「どう再開してよいかわからない」と生活支援コーディネーターたちからも問い合わせが届いています。

さて、さわやか福祉財団では、コロナ禍における多様な助け合い活動の工夫と取り組みの動画を制作し、全国へ発信しています（表紙裏参照）。8月から当財団のホームページにてご紹介していますが、皆様ご覧いただいていますでしょうか。紹介する事例は6事例。財団内の会議で事例を出し合い、居場所の取り組みや子ども食堂、認知症や高齢者と地域のつながりづくりなど多様な切り口での取り組みを選び、

大阪府門真市のゆめ伴総合プロデューサー、森安美さんインタビューの様子

高齢者と高校生の Zoom での交流会（大阪府門真市）

7月から撮影業者と共に取材を進め制作しています。

7月には奈良県生駒市、8月には静岡県袋井市、そして、9月には大阪府門真市を訪問し、取材を行いました。東京を中心に都市部の感染者数が減らない中ではありましたが、現地の皆様は快く取材を受け入れてくれました。夏の暑い日も早朝から対応をしてくださり、人と人とのつながりの大切さをますます実感したことや、みんなで話し合って新たに始めた活動の楽しさ、再開のうれしさなどをいきいきと語ってくれました。私たちは感染予防について細心の注意を払いながら、撮影とインタビューを行いました。セリフを作ってお願いしたわけではありませんが、インタビューで発せられるコメントは心にグッとくるしびれる素敵なコメントが多く、編集で頭を悩ませていますが、この動画が多くの皆さんの心の動きにつながり、多様な助け合い活動の広がりにつながってほしいと願っています。そして、住民主体による助け合い活動の素晴らしさと参加する人たちの輝く魅力を実感しながら、チームで制作を続けています。

（鶴山　芳子）

職員訃報

故　鈴木　緑郎さん（享年77歳）

当財団大阪駐在として活躍された鈴木緑郎さんが、9月28日にお亡くなりになりました。企業を退職した後、ボランティアスタッフとして、主に関西地区企業との関係づくりや当財団への遺贈に関する活動などでご活躍いただきました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げますとともに、これまで故人にお寄せいただきましたご支援に心より御礼申し上げます。

じぶんの町を良くするしくみ。

赤い羽根共同募金は、あなたの町の子どもたち、高齢者、障がい者などを支援するさまざまな福祉活動に役立てられます。

災害時には、「災害ボランティアセンター」の設置や運営など、被災地支援にも役立ちます。

赤い羽根共同募金

www.akaihane.or.jp 赤い羽根 検索

「連合・愛のカンパ」

団体立ち上げ・新規事業立ち上げのための準備金支援のお知らせ

さわやか福祉財団では、今年度も日本労働組合総連合会（連合）「連合・愛のカンパ」より資金をご提供いただき、地域の住民主体による生活支援等の助け合い団体立ち上げや新規事業開始を支援するための助成を行います。

コロナ禍の中でも、人と人とのつながりや助け合い関係をつくろうと、さまざまな知恵や工夫による取り組みが生まれていることと思います。各市区町村の生活支援コーディネーターと協議体が支援した助け合い活動（地縁組織やＮＰＯ、グループ等）の立ち上げ等を支援するためにも、ぜひご活用ください。

今年度の助成対象は、2019年10月以降に団体を設立したところ、または、既存の団体であっても新しい事業を開始したところです。１団体につき上限15万円（約17団体）を予定しています。

応募期間：2020年10月12日～2020年11月30日

助成対象：2019年10月～2020年11月までに立ち上がった、または、開始する予定の新しい活動

詳細や応募方法は、当財団ホームページの「ニュース」をご参照ください。

＜当財団ホームページ・ニュース＞
https://www.sawayakazaidan.or.jp/category/news/

昨年度助成先の皆さんから

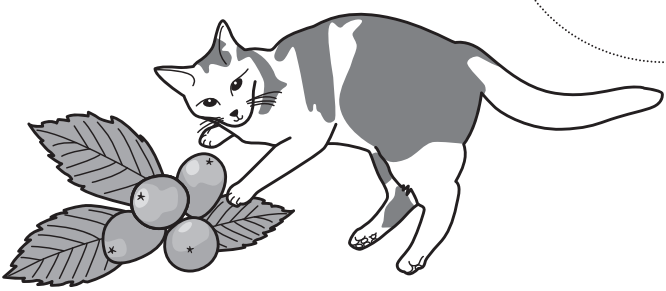
◎愛のカンパ助成金のおかげで予算にゆとりを持ち、できることが増えました。水しか出ない居場所でしたが湯沸かし器を購入でき、冬のお料理会でも食器洗いが気持ちよくできます。（秋田県大館市・としょ木漏れ日）

◎助成金を活用して、皆が集うあずまやを造りました。おかげで散歩途中の方、農業に関心のある方が寄ってくれるようになり、何人かで話に花が咲く場面が見られます。（群馬県高崎市・よってきない！　元気な農園）

◎市から推薦を、生活支援コーディネーターから申請事務の支援をいただき、助成金をいただくことができました。これまでスタッフが自前のパソコンやプリンターを使用して事務を行っていましたが、今後は広場にいながらにして事務処理、ＰＲ誌発行ができ、大幅に効率がアップ。広場運営の大きな力になっています。（新潟県阿賀野市・ふれあいサポートすいばら）

お問合せ：立ち上げ支援プロジェクト（担当：鶴山、内田、原島）電話（03）5470-7751

みんなの広場



コロナ禍後の未来へお互い頑張ろう

下川　孝志さん　68歳　北海道

地方議員を通じて地域活動をしているが、地域づくりで一番欠けているのが助け合い活動である。人間が共に生きる原点なのに、個人主義・経済活動中心の中で忘れられてしまっている。私は北海道開拓者2世ですが、開拓者やアイヌコタンの生活は、まさに助け合い活動で成り立っていたのです。幾多の疾病・伝染病・予想を超える冷害を経験し、乗り越えてきました。経済的リスクを前面に出せばマイナスばかりですが、人間として助け合って生きる社会として未来を見れば、コロナに負けていられません。

全国一律の発想を慎み、それぞれの地域に合った生き方を目指せば、コロナ禍後の社会に希望が見えてきます。お互いに頑張りましょう。

助け合わないと、人類は滅びると思います

投稿募集

『さぁ、言おう』は、皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ、ご意見をお寄せください。

＊添付の投稿ハガキや投稿用箋などをご活用ください。
＊掲載にあたっては、誌面の都合により編集要約させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください。

送付先

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館７階
公益財団法人さわやか福祉財団『さぁ、言おう』編集部宛
FAX：(03) 5470-7755
E-mail：pr@sawayakazaidan.or.jp

Tsutomu Hotta

私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さぁ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さぁ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。
さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人年会費	Aコース	10,000円
	Bコース	3,000円
法人年会費（1口）	Aコース	100,000円
	Bコース	20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付をいただく場合のお振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団
郵便払込　００１２０-９-６６８８５６※
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３７３１７１４
りそな銀行　芝支店　普通預金　口座番号１１７４２９７

※手数料不要の専用用紙をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

＊いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。（mail@sawayakazaidan.or.jp）

表紙絵から　はり絵・池田げんえい

「大紅葉に雨やどり」

編集後記●「活動の現場から」は、「地域助け合い基金」で助成させていただいた「ひみキトキトこども食堂ネットワーク」。周囲を巻き込んでの活動はさすがです（Ｐ４～）。●昔からあった地域のふれあい・助け合い。時代が変わろうとも忘れてはいけないものがあります（Ｐ16～「裏を見せ、表を見せて…」）●「連合・愛のカンパ」の応募が今年度も始まりました（Ｐ28）。●「ＮＥＸＴ」動画は、第３弾がリリースとなり11月には第４弾も。ぜひご覧ください（表紙裏）。●『さぁ、やろう』vol.14は堀田会長の対談２本立てです（裏表紙）。

助け合いを
広げよう！

新 ひとりごと

川北　秀人

自治とは、自分たちで決めて、自分たちで担うこと。
なのに、決めることを先送りにしたり、
誰かに決められてしまったりすると、担うことしか残らない。
それが負担感のもとになる。
決めるためには、材料が必要。
「これまで」と「これから」を見通すことから。

●ＩＩＨＯＥ
［人と組織と地球のための国際研究所］代表者

組織目的は「地球上のすべての生命にとって、民主的で調和的な発展のために」。ボランティアやＮＰＯを皮切りに、行政、企業、そして町内会などの地域運営組織の支援を通じて、草の根から持続可能性を高める働きかけを続けています。

さわやかおう　11月号

通巻327号　2020年11月10日発行
（毎月1回10日発行）
表紙絵　池田げんえい
イラスト　すずきひさこ
福島康子
レイアウト　菊池ゆかり
印刷所　日本印刷株式会社

発行人　清水肇子
発行元　公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751　Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
https://www.sawayakazaidan.or.jp
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

さぁ言おう 11月号
令和2年11月10日発行
（毎月1回10日発行）
通巻327号
発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階

助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

情報紙『さぁ、やろう』vol.14発行！

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さぁ、やろう』。新地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからもダウンロードできます。

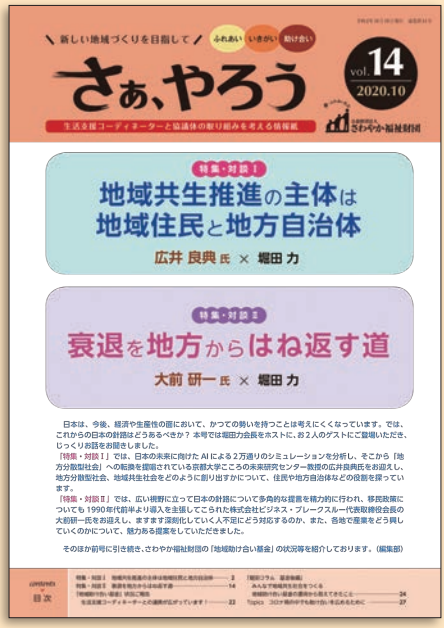
ぜひご活用ください。

【vol.14目次】

＊特集・対談Ⅰ　地域共生推進の主体は地域住民と地方自治体　広井良典氏×堀田力
＊特集・対談Ⅱ　衰退を地方からはね返す道　大前研一氏×堀田力
＊「地域助け合い基金」状況ご報告　生活支援コーディネーターとの連携が広がっています！
＊「堀田コラム　基金後編」　みんなで地域共生社会をつくる　地域助け合い基金の運用から見えてきたこと
＊Topics　コロナ禍の中でも助け合いを広めるために

vol.13

vol.12



vol.14

【お問合せ】メール　post@sawayakazaidan.or.jp
電　話（03）5470-7751